
輝ける星

三谷尾だま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝ける星

【Nコード】

N5014BA

【作者名】

三谷尾だま

【あらすじ】

ある満月の夜に、ルニエはバルコニーで勝手にお月見をしていたラ・コスタと名乗る不思議な少年に恋心を抱く。翌朝、風邪を引いてしまったルニエのところへ診察に訪れた主治医のキュラソーのある発言から、彼がラ・コスタの兄ではないかと疑い始め、次第にそれは……。少女と不思議な少年&主治医の恋愛ファンタジイ。

はじめに（登場人物）

あらすじ：ある満月の夜に、ルニエはバルコニーで勝手にお月見をしていたラ・コスタと名乗る不思議な少年に恋心を抱く。翌朝、風邪を引いてしまったルニエのところへ診察に訪れた主治医のキュラソーのとある発言から、彼がラ・コスタの兄ではないかと疑い始め、次第にそれは……。少女と不思議な少年&主治医の恋愛ファンタジー。およそ117,000字くらい（未確定）。

全年齢対象、三人称・常に主人公視点。この作品は全年齢対象ですが、このシリーズを全て読もうとすると、R15となります。ただ、既出のキャラクタが出てきはしますが、主人公や作品傾向が異なるため、そのまま続いているわけではないです。

カタカナ表記が少し変わっています。適当に読み飛ばすか、どうしても気になる方は読むのをお止め下さい。

キーワード：恋愛ファンタジー、ほのぼの、歳の差、魔法、ハッピーエンド

< 主な登場人物 >

ルニエ・コルドン：主人公

ラ・コスタ

キュラソー：主治医

コルドン氏：ルニエの父

コルドン婦人：ルニエの母（故人）

ルニエの妹

エル・テソロ：家庭教師

この作品は、以前ブログで掲載していたものを加筆修正したものです。誤字や変換ミスがあれば、お知らせいただけると嬉しいです

(カタカナ表記に関しては、修正しない場合もあります)。伏線やネタバレに関するご感想などありましたら、もくじページのweb拍手やメッセージからどうぞ。

また、エピソードを除き、作中の日付とおおよその時間に合わせ投稿する予定です。各話の文字数などバラつきがありますのでご了承ください。

「お嬢様、そろそろお休みにいられて下さいませ」

「分かっていきます」ルニエ・コルドンは、与えられた自室のソファで本を読んでいた。ドアの向こうから聞こえる声に内心嫌々ながらも機械的に答える。

この応答は今夜、既に三度目。四度目になれば、夜も遅いから早く寝るように、とわざわざ父親が直々に説得しにくるのだ。今度こそ明かりを消して、ベッドに入って寝た振りをしななければならない。

ルニエはもうすぐ十六歳になるというのに、この年になってまだ、十時にはベッドに入って寝なさい、と言ってくる父が信じられなかった。だから、女中と今夜のようなやり取りをどうにか繰り返し返して、せめて十一時まではベッドに入るのを引き伸ばすようにしている。

4

「わたし……、もう幼い子どもではないのに」溜息を吐いて読みかけの本を畳み、照明を消しながら、ルニエはそう呟いた。

照明を消して初めて気付いたのだが、どうやら今宵は満月らしく、人工的な光源がなくとも、差し込む月光で部屋はまだ仄かに明るい。ルニエは窓の前に立つと、窓ガラス越しに光り輝く月を見ながら、恨めしそうにカーテンを閉めた。

（わたしはもう眠らなければいけないのに、おまえは随分と暢気に輝いているのね）

カーテンによって光が遮断され、辺りが暗闇に限りなく近くなる

と、周りに比べてぼんやりと光っている場所に自然と目が行った。天井から吊り下げられている数々の丸い物体は、太陽系の惑星を再現した模型で、誕生日に父から貰ったものだった。

自分で飾り付けをする、と言ったルニエを父が必死に止めたので、仕方なくその作業を、椅子から落ちても大丈夫そうな人物を選びすぐって任せた。模型は彼によって順番どおりに並べられたが、当然ながら距離の縮尺は滅茶苦茶だった。それ以前に、そもそも忠実に再現すると見映えが悪いためか、全ての惑星の大きさも似たり寄ったりではあったが。

けれど、ルニエはこの模型が気に入っていた。コルドン氏が今までくれた贈り物の中では、きつと一番だ。ただ、その理由は……、と考えると、説得力のあるものを思い付くことはできなかった。曖昧な理由のはっきりとした感情である。

ルニエは昔のことを思い出しながらベッドに滑り込む。

初めコルドン氏は、ごく普通の父親にマスタードをちよつと足した程度のピリツとした人だったが、あれはルニエが七歳のときだった。妻が二人目を産んだあとそのままこの世を去り、彼はそれ以上なにかを失うことを怖れるように、まるで消えた穴を埋めるかのように、残された二人の娘たちを可愛がった。いまになって思うと、可愛がるというよりは過保護がさらに行きすぎた感じで、『母さんの分まで生きる』は父の口癖になった。

それを聞きたびにルニエは母のことを思い出し、父が可哀相になる。だから、できるだけ良い子を装って、できるだけ父の言うとおりにした。彼の気遣いは嬉しかったし、そうすることで自分も親孝行をしているつもりだった。

けれど、ふとルニ工は気付いた。『母さんの分まで生きる』と言われるたびに、肩が少し重くなることに。その圧力の中でも走れそうだったが、ときどき足がもつれて転びそうで、全力ではとても走れそうではなかった。初め少しだったマスタードは次第に入れすぎになって、顔をしかめて我慢しないと涙が出るくらいになってしまったのだ。

眠る時間に関しては、ルニ工は眠りたいという欲求があまりなかったので、最近では七時間以上も寝ていると、寝過ぎで頭がとろけそうになる。かといって、父に睡眠過多であると文句を言うのも気が重い。そしてたどり着いたのが現在の中途半端な作戦だ。

無理やりベッドに横になり、何度も瞬きをするうちに目が暗順応していくのを感じながら、久しぶりに薄く光る模型の太陽と惑星を数える。何度も何度も数え直したが、どうしても一つ足りなかった。

(……太陽と水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星……)

全部ある。しかし貰ったときは、確かに十個あったはずだ。ルニ工は首を傾げる。

「一体、なにが足りないのかしら？」

考え始めると、それが何なのか気になって気になって、どんどんどんどん眠れなくなっていく。模型が入っていた箱も説明書もとつくに捨ててしまったし、こんな時間にわざわざ誰かに聞くというわけにもいかない。

仕方なくルニエは起き上がると、ベッドの横のランプを置いてある小さな机の上にアロマセラピーに使うポットを置く。水を注ぎ、オイルを垂らし、スウィッチを入れてタイマを合わせた。改めてシートを被ると、部屋の中にそっと満ちていく新しい空気で、深くゆっくりと呼吸をする。

(良い夢が見られますように……………)

ルニエは目を閉じた。

ふと、微かに聞こえる鼻歌で、ルニエは目を覚ます。枕元の時計を見ると、短針は2を指していた。

風に揺れる木の葉が擦れるのに似た鼻歌は、不規則に抑揚が取り入れられ、ルニエの心に僅かな不安感と大いなる好奇心を掻き立てた。

(誰かいるのかしら)

前髪を掻き揚げながらゆるゆると起き上がり、辺りを見回す。少し肌寒い。バルコニーへと続く扉の前のカーテンに映る人影。ルニエがやっと気付いたときにはもう、いつの間にか歌は聞こえてこなくなっていた。

急いでカーディガンを羽織り、できるだけ足音を立てないようにゆっくり、少し離れた窓に近寄ると、カーテンの隙間からバルコニーの人物の正体を突き止めようとした。先ほど聞こえた鼻歌が、原形を留めてないくせに、頭の中でやけにリピートされてくる。

隙間から差し込む月明かりは、予想外に強くて眩しい。ルニエは少し目を伏せて、目が慣れるのを待った。

ルニエの部屋にあるバルコニーは、それほど広くない。大体、人が三人並べるくらいで、隣にある妹の部屋にバルコニーはなかった。天気の良い日に椅子を出して座ったりするベンチがあるが、それ以外は特別なにも置いていない。

もう一度外を見たとき、今度は、背の低い男の子が懸命に空を見上げてるのがぼんやりと確認できた。バルコニーは落ちないように、ルニエの胸くらいの高さの手摺がぐるりと取り囲んでいる。どうも男の子はその手摺に腰をかけているのだ。二階であるルニエの部屋に、どうやって彼は侵入したのだろうか。背をこちらに向けているので顔まで見ることはできなかったが、きっとルニエよりは年下だろう。

彼が着ている黒っぽいブレイザには見覚えがあった。魔法学校の制服だ。

こんな真夜中に他人の家のバルコニーで、彼は一体なにをしているのだろうか？ 好奇心はふつふつと煮詰まっていくな。ドキドキする心臓の音が周りにも聞こえそうなくらいに高く鳴る。ついにルニエは、バルコニーへの扉に近付いてノブを回した。鍵がかかっている。ルニエは鍵を外した。

何故だかどうしても、その少年の顔が見たくなって……。

隙間から入り込んだ冷たい風が、扉を押し開けてルニエを包む。

扉は静かに音を立てて開き、その音は少年にも聞こえたはずなのに、彼は振り返ろうとしなかった。ルニエはごくりと唾を飲み込み扉を閉め、そのまま数歩近付いた。

「……きみは、誰？」ルニエの声は静かすぎる夜に染み渡るかのようだ。

躊躇せず尋ねたその声を待っていたかのように、少年がやっと振り向いてにっこり笑う。月の光のせいかな、ルニエには少年の眼が一

瞬だけ赤く見えた。

「誰……………？」少年が質問に答えてくれなかったため、さらになにか特別な答えを期待するようにもう一度尋ね、少年相手に大した警戒心も働かなかつたのもあって、彼の顔をよく見ようと近付く。

風は寒く感じなかった。

キラキラと月の光を浴びている彼は、ルニエが思わず見とれてしまっただけ綺麗だった。色素の薄い髪、青白く照らされた肌、月光の下で強調されているとはいえ、どこか作り物じみて見える少年の容貌を『人形のような』と形容しても強^{あなが}ち間違いでない。

「こんばんは、お嬢さん。月の綺麗な夜ですね」彼は大きな目を細める。

彼の声は、まだ高い子どもの声で、こんな月夜には不似合^あいだっ^たた。

ルニエは風に流される髪を押さえて、まるで蝶をそっと捕まえようとする子どものように、ゆっくりとさらに近付いた。昔、月夜に妖精^{フェアリー}が子どもを攫^{さら}いにくる絵本を読んでもらったことがあった。もしかすると、彼もその類^{たぐい}なのかもしれない。そのほうが、しっくりとする。

だが、魔法学校の制服を着た男の子の妖精というのも変で、しかも彼の制服は大きすぎて、ぶかぶかだった。

「こんな夜更けに泥棒さん…………、かしら。どんなご用？」

ついに手が届く距離まで来ると、ルニエは改めて少年の顔を見上げる。

一瞬、風が止んだ。

さっきまで耳に響いていた心臓の音も、急に静かになって、いまはもうルニエには聞こえない。

「うーん、僕は、悪い魔法使いに呪いの魔法をかけられていてね。満月の光を浴びないといけないんだ」くすぐったそうにそう言っつて、少年はルニエに顔を近付けた。

息がかかるくらい側にある、吸い込まれそうな瞳を見つめ返す。

「……呪い？」

彼はルニエのぼんやりした呟きに対して「そう……」と答えると、息をするよりも自然にキスをしてきた。

なにが起こったのか、全然解らなかった。

ただ、冷たかった唇が離れると、ルニエは軽い眩暈を感じて手摺を押さえる。驚きで涙が出そうになるのを必死でこらえ、現状を理解しようと少年を見た。

彼は、きよとんとした表情でルニエを見ていた。

「あれ、おかしいな？」彼は首を傾げる。「たしか悪い魔法使いの呪いは、お姫様のキスで解けるって、本に書いてあったのに……」

少年は少し笑うと、ちよつと舌を出した。

「お姫様のキス……？」ルニエは深呼吸をしながら、なかなか洒落のきいた悪戯だと思った。

「あれ？ 怒らないんだ、君は」少し残念そうに、少年は言う。

それを見てルニエは仕方なく微笑んだ。そもそも悪戯の目的は、相手を驚かせたりして反応を楽しむことなので、ルニエが怒らなかつたことは理になつていのだが、本当は怒るところか、ただなにも考えられなかつただけだ。油断していたとはいえ、たとえ悪戯だったとしても、いきなりキスをされるだなんて考えられない。

「ええと、きみの名前、教えてくれる……？」

ルニエが尋ねると、彼は恥ずかしそうに顔を伏せて答える。「僕はラ・コスタ……。名前を聞くつてことは、やっぱり怒ってるんでしょう？」

たしかに、キスをされた相手に興味を持っているのは本当だったが、拗ねたように悪戯をした張本人の彼が言ったので、ルニエは可笑しくて笑ってしまう。

「本当に、怒ってないから……」

ラ・コスタはちらつとルニエを見る。「ふーん、君は悩み多きH型にしては割り切りが良いね。それに、綺麗な青い眼だ……」

ルニエは驚き、血液型を当てられたのを疑問に思うよりもまず、咄嗟に左目を押さえて少し後退した。

(忘れていたわ！ 今日満月だったのに……)

好奇心に駆られて迂闊な行動を取ってしまったことをルニエは悔やむ。その後悔は、舌打ちを何回しても足りないくらいだ。

「何故、隠すの？」ラ・コスタは不思議そうに尋ねると、手摺から飛び下り、ルニエが離れた分だけ近付く。

同じ高さ立つと、ルニエの背が頭一つ分くらい高い。

ルニエはさらに一步後退した。

「ねえ……ルニエ、逃げないで」伸ばしたラ・コスタの手がルニエの髪に触れそうになる。

「目が光るだなんて……、気味が悪いでしょう」ルニエは小さく叫ぶように言って目を閉じ、自分自身を隠すために両手で顔を覆う。

しかし、触れそうだった彼の手は、いつまでたつても届く気配はなかった。恐る恐る目を開けて指の隙間から見ると、彼は背を向けてくれていた。

「……ごめん、軽率だった」彼は少し間を置いた。「……それ、青き月の涙」だよ？ 本とか話とかでは知ってたんだけど、実際に持っている人を見るのは初めてだったし、嬉しかったんだ。綺麗で、もつと見たかったから、君が嫌がっているって、すぐに気付けなかつた」

ルニエは左目を隠していた手を離し、悲しみに顔を曇らせる。

『青き月の涙』は、ルニエが持つ形質の名前だ。家族の中では、死んだ祖母とルニエの左眼だけが青かった。しかしそれは、昼間ではほとんど区別がつかず、夜、月の光を浴びて青く淡い光を放つ。

この眼は、ルニエの最大のコンプレクスだった。

「わたし、この眼が嫌いなもの……、大嫌いなもの！ 普通の青い眼なら良かったのに」ルニエの両方の目から涙が流れた。

「……僕は空が飛べるよ」ルニエに背を向けたまま、ラ・コスタは呟く。

「それは素敵ね……」

そうルニエが答えると、少しの沈黙のあと、再びラ・コスタがそっと呟いた。

「……僕は、普通の青い眼よりも、まるで、月の祝福を受けたみたいな君のその、青い眼が綺麗だと思うよ」

涙は止まらない。しかし、ようやくラ・コスタがルニエを何とかして慰めてくれようとしていることに気付く。これを見た家族以外に、綺麗だと言われたことは初めてだった。お世辞でも嬉しい。月光が照らすその小さな紳士に向かって思わず微笑んだ。

「ありがとう……」

すると、ラ・コスタは続ける。「緑は太陽だけど、青は月の色。僕は気紛れで神秘的な、その青い眼が好きだよ」

緑がどうして太陽の色なのかルニエには分からなかったが、いま流れているのは、きつともう悲しい涙ではないと思った。

昔からルニエは、この眼に閉じてろくな目には合わなかった。それなのに、まさかこんな少年に慰められるとはとても意外だった。深呼吸をして、涙を拭う。

「……もう、こっちを向いても大丈夫よ。これは……、キスの代償ね」

「やっぱり怒ってたんだ」ラ・コスタはボソリと呟き、初めと同じようにゆっくりと振り向く。そして、様子を窺いつつ側に寄ってきた彼は、ルニエの手を取って跪ひざまずいた。

その手もやはり冷たい。

「それはそれは、身に余る光栄。ついで、……といっでは何ですが、今宵、貴女の部屋のバルコニーにお邪魔したことも許していただけますか？」

ラ・コスタのまるで騎士のような行動が可愛らしかったので、ルニエは思わず吹き出しそうになった。だがこらえて、毅然と振舞う王女のように、ラ・コスタの手を軽く握り締める。

「許しましょう。だけど……どうして、この場所にいらっしゃったのかしら？」

「知らないの？ ここって、綺麗に満月が見える場所なんだよ。でも……、見つかったちゃうなんて、不覚だなあ。普通は夜中に起きないものでしょう？」許してもらおうと、さっさと騎士の真似は止めた

ラ・コスタは、本当に残念そうに言う。

普通は、夜中に人の家のバルコニーでお月見なんてしないでしょう？ という反撃を思い付いたが、ルニエは実行しなかった。どこまで彼が本気なのかは判らなかったが、お月見という理由で、今夜彼がこの場所にいたことを責める気など、ルニエにはもうなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5014ba/>

輝ける星

2012年1月14日02時49分発行